

投資家のためのETFガイド

自分に最適なポートフォリオを構築する



目次

03	投資の選択肢があり過ぎて困っていませんか？ 悩みを解決する一助になります	投資の選択肢が多過ぎて、困惑していませんか。このETFガイドを通じて、プロセスを簡素化しましょう。
04	ETFの基礎 ETFの歴史と基本情報	ETFの誕生秘話と基礎知識を学びます。
07	自由に使える多くのツール ETFのメリット	コストや税効果、流動性、透明性など、ETFによってポートフォリオがどのように最適化できるかを理解します。
10	さまざまな投資の方法を比較する ETFが良いと取りである理由	様々な投資手段 (ETF、投資信託、個別株式) の違いを知ります。
12	ETFを評価する 知っておくべきこととやるべきこと	ETFの分析や自分に合ったポートフォリオの構築に役立つ要素を特定します。
15	ポートフォリオ内でETFを活用する方法 そのためのETFがあります	戦略的資産配分や戦術的資産配分など、ETFによって可能となる多様なポートフォリオ戦略を探ります。

投資の選択肢があり過ぎて困っていませんか？

悩みを解決する一助になります

資産運用。誰もがその重要性を認識しています。お金が自分のために働いて(成長して)くれれば、経済的な目標は達成しやすくなりますが、認識することと実行することは同じではありません。

今はデジタル時代であり、様々な資産運用に関する情報に溢れているため、私たちは選択肢過多という現実直面しています。あまりに多くの選択肢の中から選ばなければならないため、投資家は自分が正しい投資対象を選択しているのか疑問に思ったり、最悪の場合、考え過ぎて行動できなくなる状態に陥ることもあるかもしれません。

誰にとっても有効な、万能の解決法はありませんが、上場投資信託(ETF)は、透明性が高く、費用対効果に優れ、税効果の高い方法で、投資家が自身の目標を、それがいかにユニークなものであろうとも、達成する一助となるかもしれません。

一方で、ETFの複雑な仕組みやメリットについて、よく知らない人もいるかもしれません。包括的で分かりやすくまとめた本編を読めば、拡大するETF市場について理解を深め、自分が望む結果に向けた道筋を自信をもって設定することができるようになるはずです。

このガイドでは、次のような質問に答えます。

- ETFとは何ですか？
- ETFは何に役立つのですか？
- ETFにはどんなメリットがあるのですか？
- ETFと投資信託、個別株式の違いは何ですか？
- ETFをどのように評価したらよいのですか？
- ポートフォリオの中で、ETFをどのように利用できますか？

ETFの基礎

ETFの歴史と基本情報

ETF: 投資家に選択肢とイノベーションを提供

ブラックマンデーとして知られる1987年10月19日、世界中の株式市場が突然の大暴落に見舞われました。米国の大企業500社の株価を指数化したS&P500種指数は、前代未聞の20.5%の下落を記録し、1日の下落率としては指数史上最大となりました¹。富は突如として失われ、大恐慌に匹敵する大暴落でした。

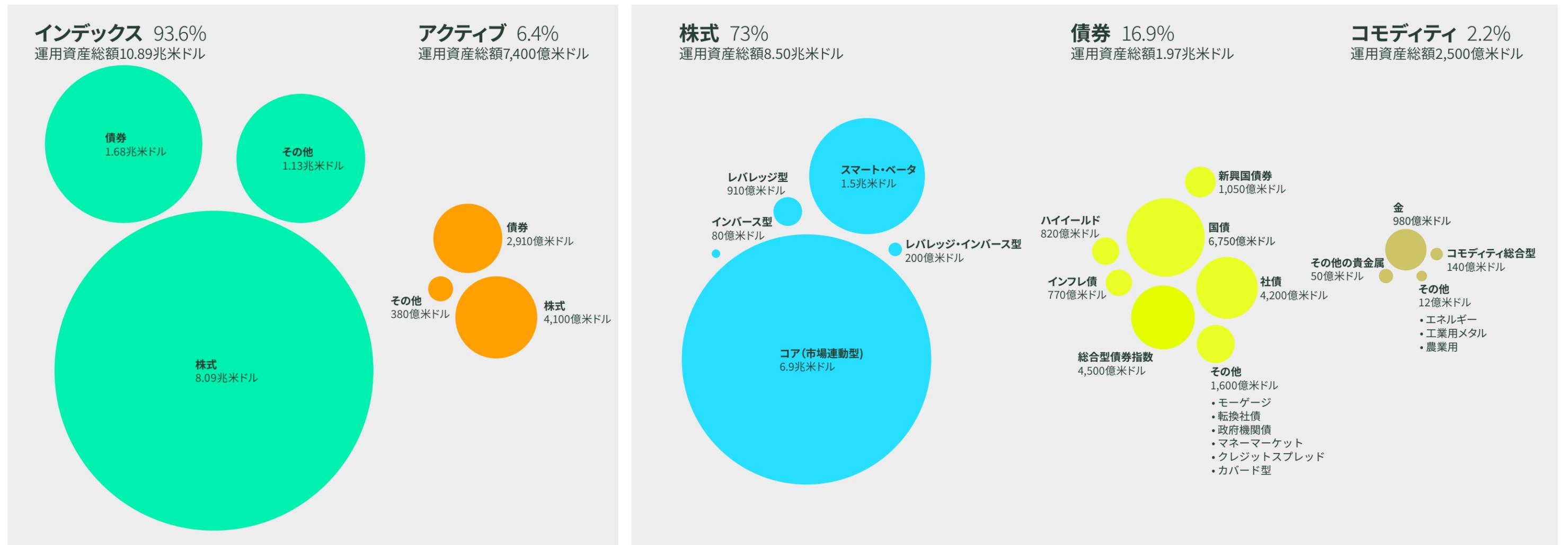
ブラックマンデーをきっかけに、規制方針やリスク管理手法が広く見直され、同時に、将来の大暴落を回避するのに役立つ新しいタイプの投資構造が生まれました。それがETFです。

1993年、ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズはSPDR S&P 500 ETF (SPY)を設定しました。これは当時、米国初のETFであり、現在では世界で最も規模が大きく²、最も流動性が高く³、最も取引量の多い⁴ETFとなっています。それ以来、ETFはベテラン投資家だけでなく投資初心者をも魅了し、市場の幅、規模、機能において、新たな高みに到達し続けています。

ETFはアクティブ運用とパッシブ運用の両方を通じて、米国株式全般から複雑な新興国債券に至る、ほぼすべての資産クラスに費用対効果の高い投資機会を提供します。こうした投資の民主化により、かつては大手機関投資家しかアクセスできなかった市場に、今では幅広い投資家がアクセスできるようになりました。

図表1

ETFは幅広い資産クラスへのアクセスを提供



出所: ETFGI Global ETF and ETF Industry Highlights Report, 2023年12月。上記に含まれる情報は説明のみを目的としています。

1 Biggest stock market crashes in US history. (米国史上最大の株価暴落)」、バンクレート、2023年9月8日付。

2 ブルームバーグ・ファイナンスL.P., 2023年10月31日時点

3 ブルームバーグ・ファイナンスL.P., 2023年10月31日時点

4 ブルームバーグ・ファイナンスL.P., 2023年10月31日時点

ETFとは何ですか

ETFを商船に見立て、株式、債券、コモディティ、その他資産など、さまざまな積荷を積んで大海原に出航するところを思い浮かべてみてください。造船会社(ETF運用会社)は、1人の商人(投資家)のためでなく、多くの商人(投資家)のためにこの船を作りました。

一人ひとりの投資家が、船と積荷の持分を持っています。多くの場合、この共同所有は満期の決まっていないオープンエンド型投資として組成されます。つまり、投資家は持分を、いつでも売却することができます。

その結果、ETFは、新しい投資家が乗船したり古い投資家が自身の判断で下船したりしながら、継続的に運用されます。この設計のおかげで、穏やかな海であれ、荒波であれ、さまざまな市場環境で耐久性と順応性を発揮します。

海の例えはこれくらいにして、Exchange Traded Fund (ETF)のそれぞれの単語が持つ意味を考えてみましょう。

- **Exchange (取引所)**: 株式や債券など、さまざまな資産が取引される市場
- **Traded (取引される)**: 売買されること
- **Fund (ファンド)**: さまざまな資産に投資され、集められた資金

これらの単語を組み合わせたETFは、株式と同様に取引所で取引される資産のバスケットを表します。こうしたバスケットは、S&P500指数やナスダック100指数といったさまざまな指数に連動することができます。

あるいは、資産クラス(債券など)、地域(米国など)、業種(ハイテクなど)、投資テーマ(イノベーションなど)といった、特定の市場セグメントのパフォーマンスを再現することを目指す場合もあります。あるいは、アクティブ運用ETFでよくみられるように、とにかくベンチマークをアウトパフォームすることを目指すものもあります。

ETFは何に役立つのですか？

手短かに言うと、多くの点で役立ちます。ETFが投資ビークル(車両)と呼ばれるのを聞いたことがあるかもしれませんが、ETFの中には、自動車と同じように、目的地に速く到達できますが、リスクが高いものもあります。また、スピードは速くありませんが、A地点からB地点へ安全に移動できる安定した実績を持つものもあります。あるいは、悪天候や悪路から守ってくれるものもあれば、追加料金を払えばプロの運転手が付いてくるものもあります。

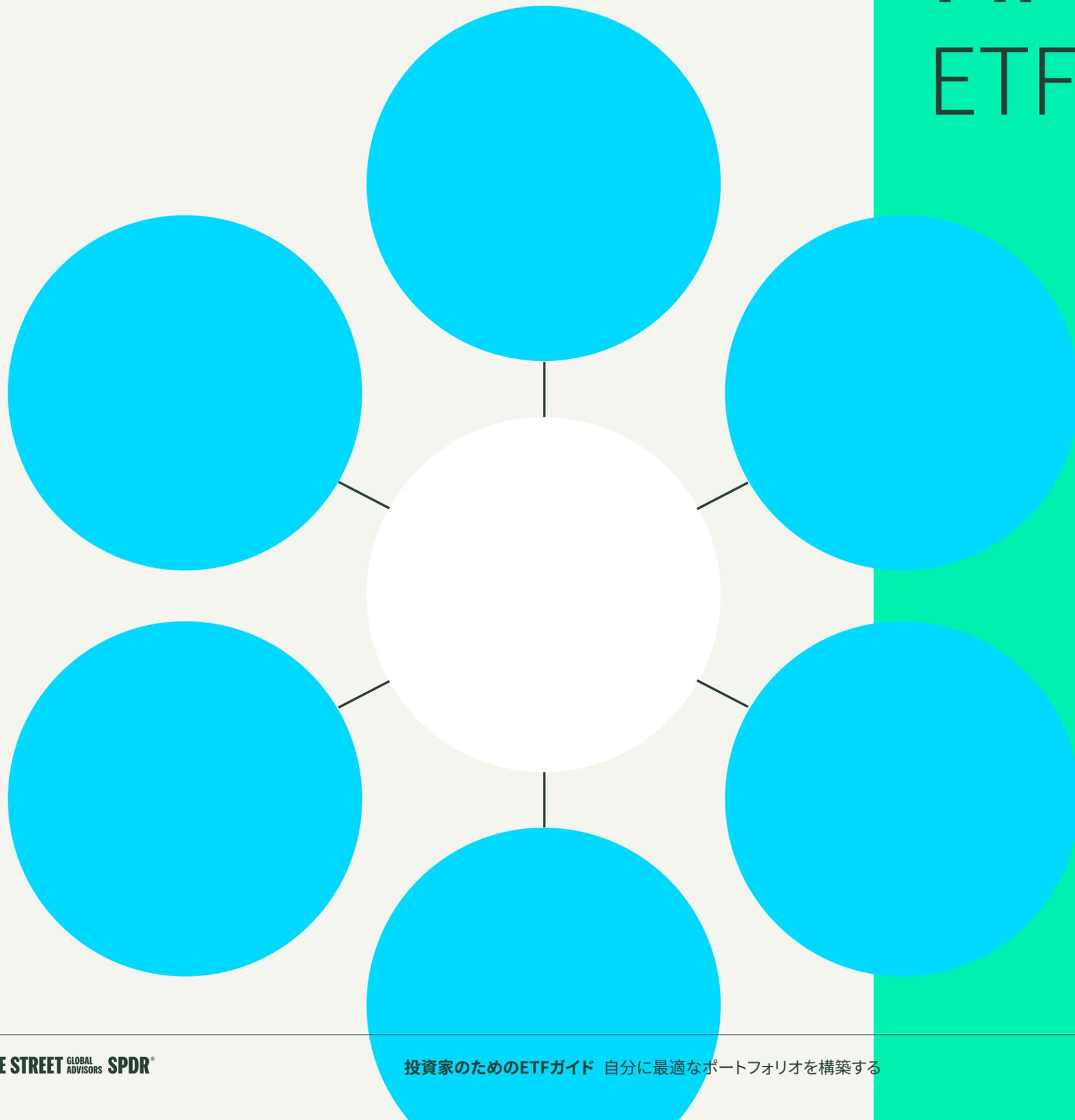
結局のところ、最終目的はご自身の経済的な目標に到達することです。この点において、ETFはさまざまな方法で展開することができるため、特に魅力的です。

具体的にはETFを利用することで、以下のことができます。

- 市場全体またはS&P500種指数のような株価指数への投資機会を得る
- 市場全体を上回るパフォーマンスを目指す方法を模索する
- 有望な業種、業界、さらには投資テーマに投資する
- 複数の資産クラス、地域、戦略に分散投資する
- 経済状況の変化に応じて素早く方向転換し、ポートフォリオを調整する
- インフレの影響を抑えたりボラティリティ(価格の変動)を低減してリスクを軽減する

自由に使えるツール

ETFのメリット



ETFの力を活用する

ポートフォリオにETFを加えることで、より多くのツールを使えるようになり、手持ちのツールの実用性と機能が強化されます。

分散投資: 例えば、保有銘柄が数銘柄に集中している場合、その銘柄がアンダーパフォームすると、ポートフォリオ全体の足かせとなる可能性があります。

資産クラス、地域、セクター（業界）で分散投資すると、集中リスクを軽減するだけでなく、さまざまな成長機会への投資機会を得ることができます。ある資産クラスやセクターがアンダーパフォームしたとしても、別の資産クラスやセクターが好調なら、ポートフォリオ全体でバランスが取れ、長期的にリターンの変動を抑えることができます。

コスト効率: 投資では手数料や経費によって、リターンが目減りすることがあります。しかし、ETFは投資信託と比べて手数料や費用が低いのが一般的です。また、ポートフォリオの回転率が低ければ、取引コストも最小限に抑えられ、特にETFは主に指数に連動することが多いため、これに当てはまります。

ポートフォリオの回転率: ファンドの原証券（銘柄）のうち、ある年に売却された証券（銘柄）の割合を指します。回転率が高いと、例えばアクティブ運用戦略など、保有銘柄が頻繁に取引されていることを示します。

投資の多様性: ETFには、数えきれないほどの投資方法があります。資産クラス全体への幅広い投資機会を得ることもあれば、バイオテクノロジーや金融サービスなど一部企業への特定分野への投資機会を得ることもできます。あるいは、配当、成長性、モメンタムといった要素で対象企業を絞ることもできます。要するに、ETFの世界は拡大し続けており、投資家のリスク許容度、投資目標、価値観に沿ったポートフォリオを構築する豊富な機会を提供しています。

透明性と取引の柔軟性: ほとんどのETFは保有銘柄を毎日開示し、更新しています。そのため、投資家は保有状況をリアルタイムで知ることができ、情報に基づいた投資判断が可能になります。さらに、投資家は取引時間中であればいつでも、証券口座を通じてETFの受益証券を現在の市場価格で売ることができます。対照的に、投資信託は取引時間終了後でなければ価格が決定されず、売ることができません。

税効果: 取引コストや運用手数料と同様に、税金もリターンを圧迫する要素です。しかし、ETFは税効果の高い仕組みになっているため、課税口座で運用する投資家もリターンをより多く手元に残すことができます。

第一に、構成銘柄の入れ替えが少ない指数に連動するETFは、ポートフォリオの回転率が最小限に抑えられるため、結果的にキャピタルゲイン税（収益に対する課税）が低くなります。

第二に、ETFの受益証券が設定され、交換される仕組みがあります。これによりETFのファンドマネージャーは保有銘柄を売する必要がありません。

対照的に、投資家が投資信託の受益証券を売りたい場合、ファンドマネージャーは投資家のポジションを現金化するために、ファンドの保有銘柄の一部を売却することがあります。この売却により課税利益が発生する可能性があり、ファンドの残りの株主が関連する税金を吸収することになります。

流動性の向上: 流動性とは、価格が大きく変動することなく、どれだけ迅速かつ容易に資産を売買できるかを指します。流動性が高いということは、多くの買い手と売り手が存在し、取引の柔軟性が高いことを意味します。

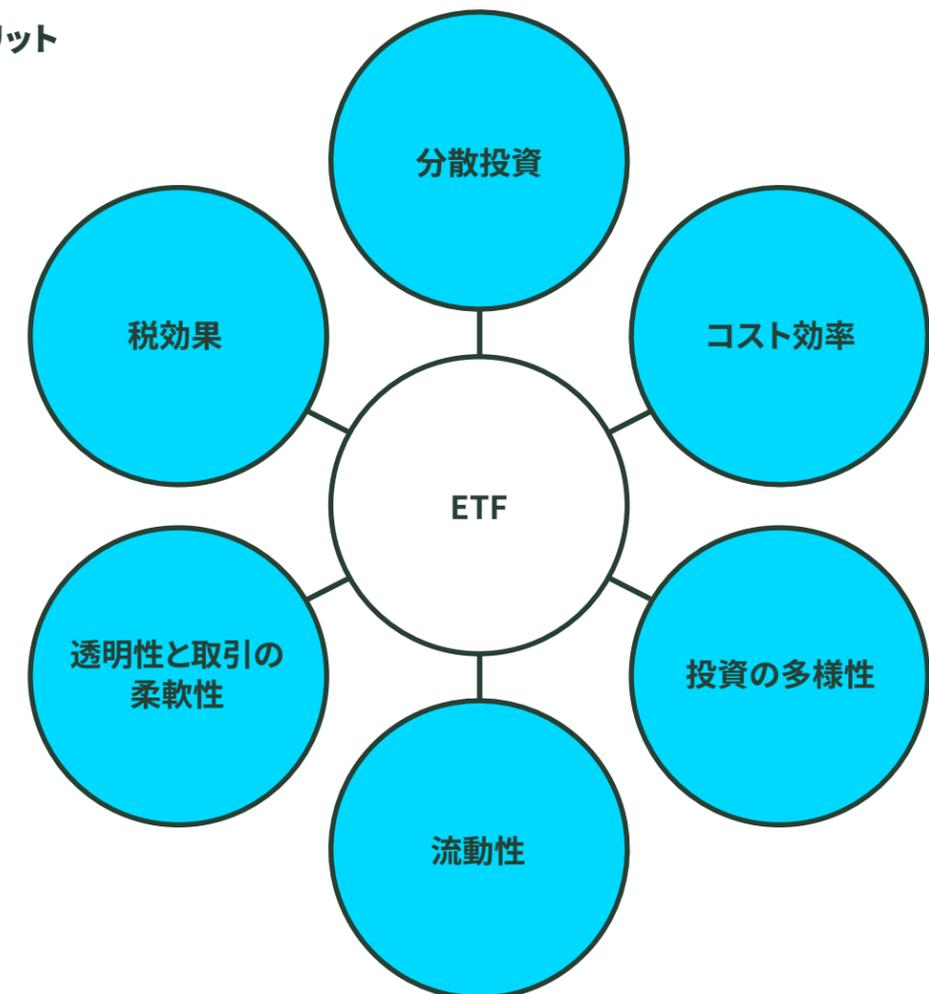
ETFは取引時間中に取引所（セカンダリー市場と呼ばれます）で売買されるため、流動性の高い投資とみなされます。しかし、ETFはプライマリー市場によっても、流動性が向上します。プライマリー市場とは、ETFが設定され、最初に売買される市場を指します。

市場は大きく2つのカテゴリーに分けられます

プライマリー（発行）市場: 証券が設定され、最初に売買される市場です。指定参加者（AP）はETF運用会社などの発行体からETFを直接受け取り、ETF運用会社は売買代金等を得ます。

セカンダリー（流通）市場: ETF運用会社を介さずに、投資家間でETFを取引する市場です。市場と聞いて多くの人が株式市場を思い浮かべるような形でETFが新規発行後にここで取引されます。

図表2
ETFの主なメリット



出所：ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ。例示目的としてのみ記載。

設定と交換のプロセス

ブロードウェイのショーを見たことがある人なら、きっと歌と踊りと華やかさに酔いしれたはずです。これが作品 (production) と呼ばれるのには理由があります。舞台の裏側では、舞台を動かす小道具係や大道具係、輝きのある視覚的パフォーマンスを支える衣装デザイナーや照明係など、多くの努力が人知れず行われているのです。

ETFも多くの点で似ています。ETFも、裏では設定や交換と呼ばれる複雑な作成工程が行われ、それが他の投資商品と比べて高い流動性やコスト効率の良さにつながっています。

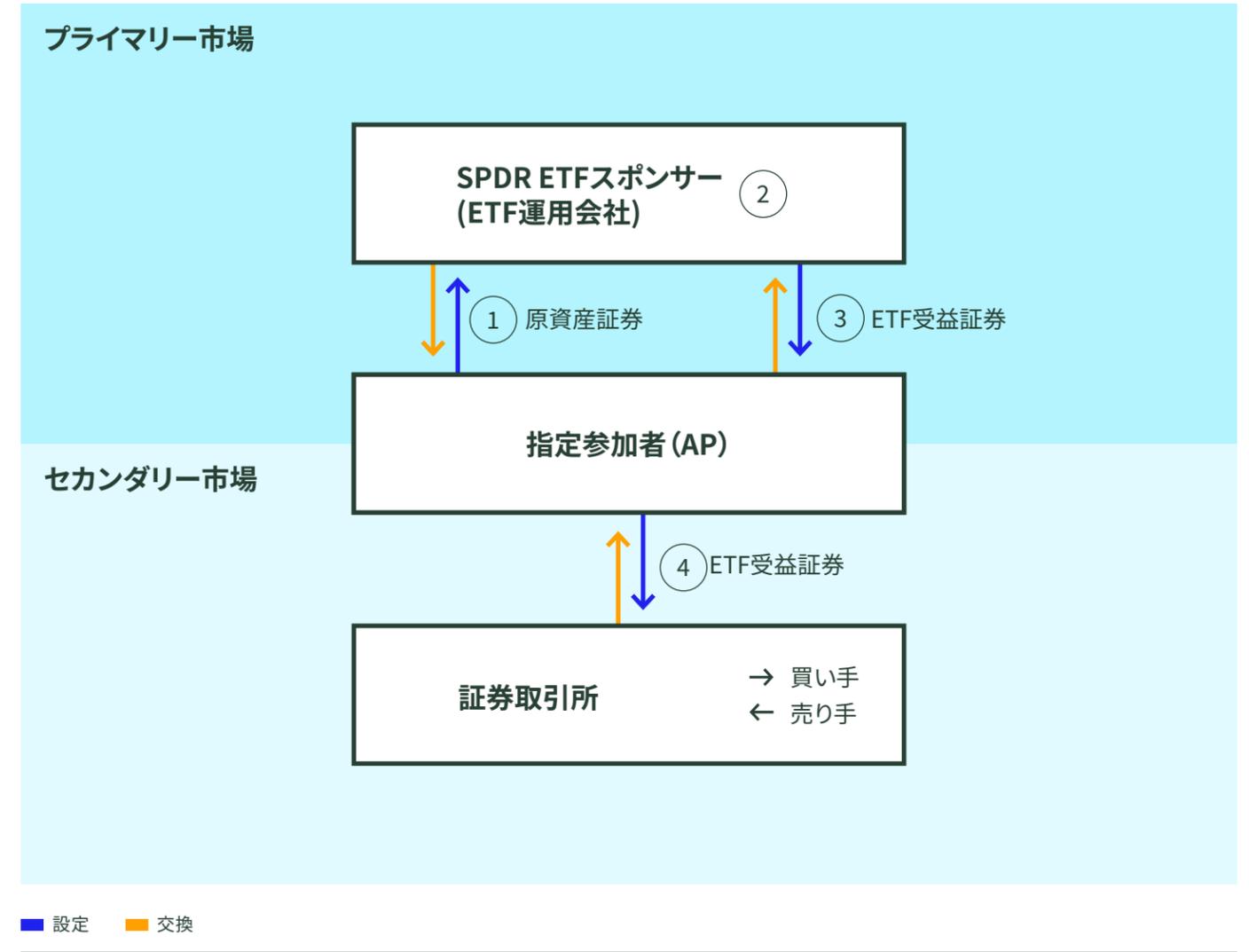
設定 では、すべての原証券を買い入れ、1つのバスケットにまとめてETFとして組み入れます。

交換 とは、ETFのバスケットを解体して個別の証券に戻すプロセスです。

例えるなら、ETFは未開封のプレゼントのようなものです。プレゼントを買い、箱に入れて、包装した状態 (設定) が1つにまとめられたETFです。その後、プレゼントを返却する必要がある場合は、包装を解いて返却します (交換)。

これは2者間、すなわちETFのスポンサー (SPDR ETFで言うところのステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ) と大手金融機関 (指定参加者 [AP] と呼ばれます) 間の取引プロセスです。

図表3
ETFの設定、交換のプロセス



出所：ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ。例示目的としてのみ記載。

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1 指定参加者はETFを構成する個別証券を取得し、ETF運用会社に受け渡します。 2 ETF運用会社はこれらの証券をまとめてパッケージ化し、ETFを設定します。 3 ETF運用会社は、ETFの受益証券を指定参加者に受け渡します。 4 指定参加者はETFの受益証券をセカンダリー市場に持ち込み、ETFは他の株式と同じように買い手と売り手の間で取引されます。 | <p>投資家はETF受益証券の微妙な成り立ちについて、深く理解する必要はありませんが、これを知ることによって、取引時間終了後に1日1回しか取引されない投資信託よりもETFの方が、流動性が高く、税効果が高く、正確に値付けされている理由を知るのに役立つはずで</p> <p>次にそれぞれの投資商品の違いについて、詳しく説明します。</p> |
|--|---|



様々な投資の 方法を比較する

ETFが良いと取り
ある理由

良いとこ取りのETF

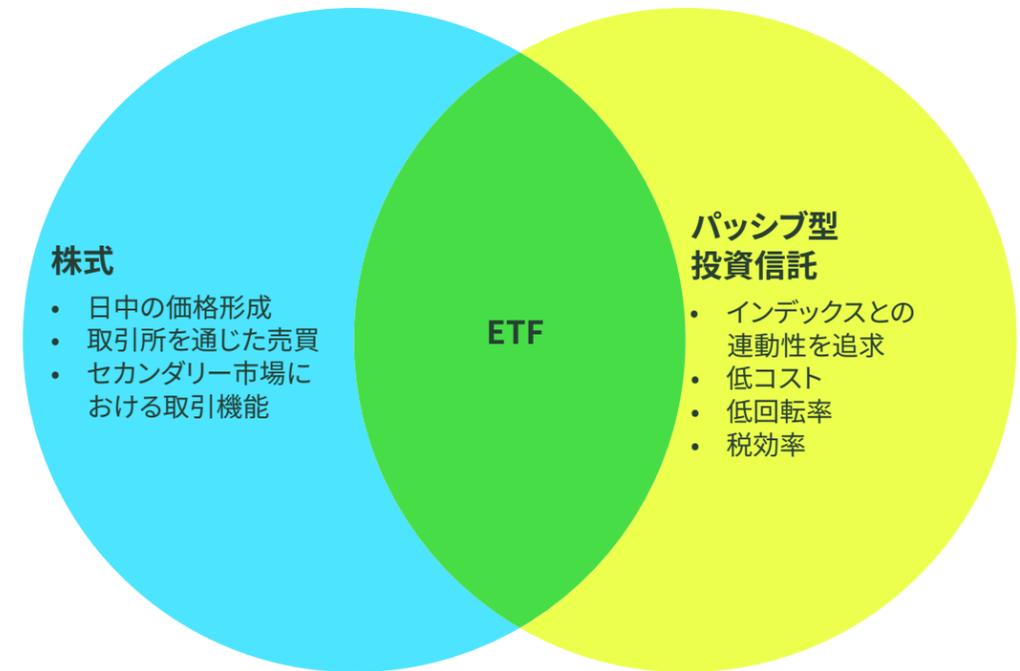
個人投資家にとって、投資の選択肢は主に3つあります。ETF、投資信託、個別株式です。

ETFと投資信託には共通点もあります。どちらもプロが運用し、さまざまな投資の選択肢を提供し、一度の取引で分散投資が可能です。しかし、それぞれの仕組みや投資の特性は大きく異なります。

ETFは、リアルタイムの株式取引と投資信託の分散効果を兼ね備えています。また、独自の設定・交換プロセスにより、コスト効率や税制上のメリットも提供します。これは、税引き後リターン最適化を図りたい投資家にとって、特に有益です。

また、多くのETFは1株の投資額から投資することができ、新規の投資家やコスト意識の高い投資家がアクセスする上で特に魅力的です。一方、投資信託は一般的に最低投資額があり、これが参入障壁となる投資家もいます。

図表4
両者の長所を享受できるETF (パッシブ型ETFとの比較において)



出所：ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ。例示目的としてのみ記載。

ETFと投資信託や個別株式の比較

	ETF	投資信託	個別株式
指数との連動	ある	ある (パッシブ型の場合)	該当なし
分散効果	ある	ある	(銘柄単位では) ない
透明性	高い (保有銘柄は毎日開示される)	低い (保有銘柄の開示は月ごと、四半期ごと、あるいは年に1~2回の場合がある)	該当なし
流動性	高い、取引時間中に取引	ばらつきがある、取引時間終了後に取引	高い、取引時間中に取引
平均経費率	0.32%	0.52%	該当なし
価格形成	市場価格	終値による純資産価額 (NAV)	市場価格
最低投資額	ない	最低投資額が設定されているものもある	最低1単元*

出所：モーニングスター・ダイレクト、モーニングスター、2024年2月29日時点。国内上場のETF、届出ファンドが対象。
* 単元＝原則100株 (証券会社により株式累積投資や株式ミニ投資を扱っていることもあるため、詳しくは各証券会社にご確認ください。)

ETFを評価する

知っておくべきことと
やるべきこと

ETFに投資する前に考慮すべきこと

洋服は、体のサイズに合わせて作らないとぴったり合うことはありません。ポートフォリオも同じです。投資先を検討する前に、経済的目標、投資期間、リスク許容度といった自分にふさわしい基準を決める必要があります。そして、自分の基準と同様に、投資目標も時間の経過とともに変化する可能性があることを忘れないでください。

投資を始めるのに必ずしも具体的な理由は必要ありませんが、家を買う、子供が生まれる、引退する、あるいはそれらすべてなど、人生の目標とそれに関連する金額について考えておくのが賢明です。必ずそうなるわけではありませんが、金額や時期を具体的にイメージすることで、ポートフォリオを構築する際の目安になるはずで

リスク許容度とは、投資リターンのばらつきにどの程度まで耐えられるかということです。株式への集中投資によるハイリスク・ハイリターンを容認できますか、それとも、保守的な投資で安定したリターンを好みますか。ETFポートフォリオの構成を決める上では、自己評価が極めて重要です。一般的に、リスクが高ければ高いほどリターンも高くなり、逆もまた然りです。

つまり、ETFに何をしてもらいたいのか、何をしてもらう必要があるかを定めるということです。自分のリスク許容度を評価し、具体的な経済的目標（予想時期も含む）を設定したら、ようやく具体的なETFについて検討・評価します。

しかし、非常に多くのETFが市場で流通している中で、自分にとって最も理にかなっているのはどれでしょうか。

ここで考慮すべき要素がいくつかあります。

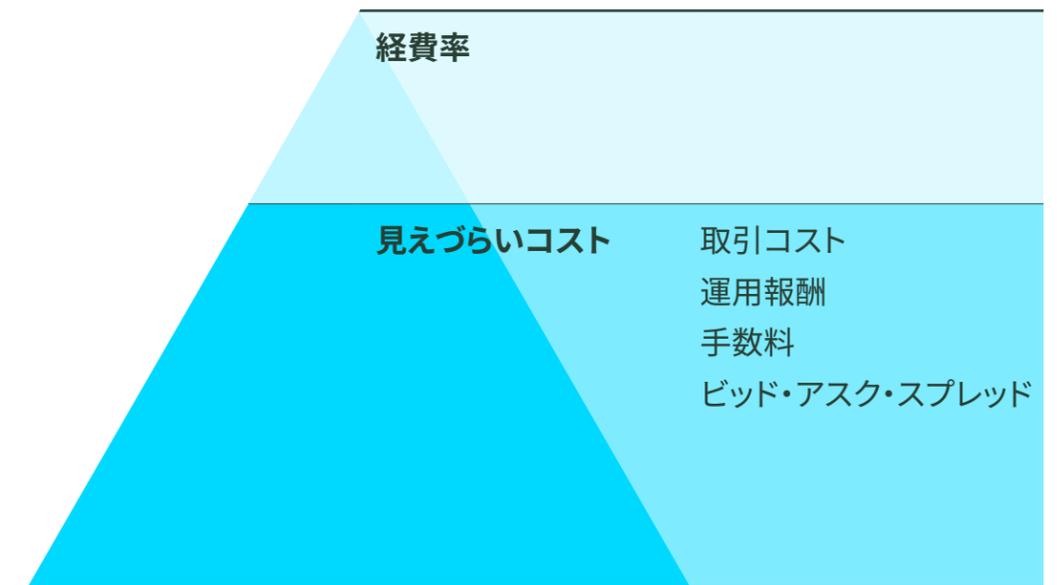
コスト

リターンは重要ですが、もっと具体的に言うと、重要なのはネットリターン(実質利回り)です。どのような種類のファンドであれ、保有するにはコストがかかります。最初に注目するのは、ファンドの経費率です。これは年間手数料をパーセントで表したもので、運用報酬や事務手数料、その他運用コストといったファンドの経費が含まれます。

取引コストと税金の影響も、保有コストにおける重要な変動要素です。例えば、投資信託は(ファンドによるが)キャピタルゲインを分配するため、税金が発生することがあります。ETFは設定と交換のプロセスのおかげで、こうした税金の負担を回避することができます。しかし、保有にかかるコストは経費、手数料、税金だけではなく、投資時点の流動性も重要な要素です。

このように、ファンドの保有にかかる総コストは、氷山に例えることができます。見えている購入価格の他に、水面下には「見えづらい」追加的な要素が隠れているのです。

図表5
経費率：保有にかかる総コストの氷山の一角にすぎない



出所：ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ。例示目的としてのみ記載。

パフォーマンスと トラッキングエラー

もちろん、運用パフォーマンスは投資家にとっての重要項目の上位に位置しているでしょうが、リターン以外にも考慮すべき指標があります。その1つがトラッキングエラーです。これは、ETFがベンチマークとする指数にどれだけ忠実に追隨しているかを示します。

トラッキングエラーは、指数のパフォーマンスと、それを再現するように設計されたETFのパフォーマンスとの間に乖離がある場合に発生します。ファンドの経費、取引コスト、指数構成銘柄を売買する難しさ、配当を再投資するタイミング、サンプリング(ファンドが指数全体ではなく、代表的サンプルを保有する戦略)などはいずれも、乖離を生み出す可能性のある要素です。

ETFのストラクチャーには2つの種類があります。

現物複製型ETF(現物ETF) は、対象とする指数を構成する証券を保有します。例えば、S&P500種指数に連動する現物ETFは、同指数構成銘柄の株式を保有します。

シンセティック複製型ETF(シンセティックETF) は、スワップのようなデリバティブを使って指数のパフォーマンスを再現します。シンセティックETFは、指数のリターンをETFに提供することに同意した取引相手(通常は銀行などの金融機関)と契約を結びます。

ストラクチャー

投資リスク

どのようなものであれ、投資にはある程度のリスクが伴い、それはETFも変わりません。各ETFのリスクは、保有銘柄やストラクチャーによって異なりますが、注意すべき点がいくつかあります。

- **市場リスク** 市場全体や資産クラスに影響を及ぼす要因によって、損失が生じる可能性は常に存在します。市場のボラティリティが高い時期には、最も安定したETFでさえ下落することがあります。
- **金利リスク** 債券ETFは特に、金利変動の影響を受けやすくなっています。一般的に金利が上昇すると債券価格は下落し、その逆も然りです。
- **信用リスク** 債券ETFには、債券の発行体がデフォルト(債務不履行)に陥るリスクが伴います。つまり、投資家に債務を返済できなくなるということです。ハイイールド債はしばしば「ジャンク」債と呼ばれ、信用リスクが高い傾向があります。
- **レバレッジリスク** 一部のETFは、リターンを増幅させるためにレバレッジ(負債)を利用しています。これは、高い潜在的利益をもたらす可能性がある一方で、潜在的損失も大きく、ボラティリティが高くなる可能性があります。

ポートフォリオ内で ETFを活用する 方法

ETF投資を実践する

ETFのメリットを理論上で理解するのは簡単です。しかし、実際に行動を起こすとなった場合、自分のポートフォリオにETFをどのように組み込んだらよいのでしょうか。この問いに答えるのは、まるでグルメ料理の調理法を詳しく説明するようなもので、可能性は無限にあります。とはいえ、最も適切なアプローチをいくつか紹介しましょう。

戦略的アセットアロケーション

個人投資家の多くは、長期的なバイ・アンド・ホールド戦略（長期間保有し続けること）を好みます。投資適格債券を通じてポートフォリオの安定性を高め、定期的なインカムを求めるのが良いかもしれません。自らふるいにかけて保有する個別の債券を選択する代わりに、債券ETFを購入することで、ポートフォリオの一部を債券に迅速かつ効率的に配分することができます。ETF運用会社があなたのために「バスケット」を作り、運用してくれます。

戦術的アセットアロケーション

市場は流動的であり、景気サイクルの展開や環境の変化に伴って常に浮き沈みしています。将来を予測することは永遠に不可能ですが、時には短期的な機会を捉えるために、ポートフォリオの配分をリアルタイムで調整することが賢明な場合もあります。例えば、コロナ禍の間、社会的・経済的不確実性の中で、市場は全体的に下落しました。ETFを使えば、即座に方向転換し、ポジションを変更することができます。

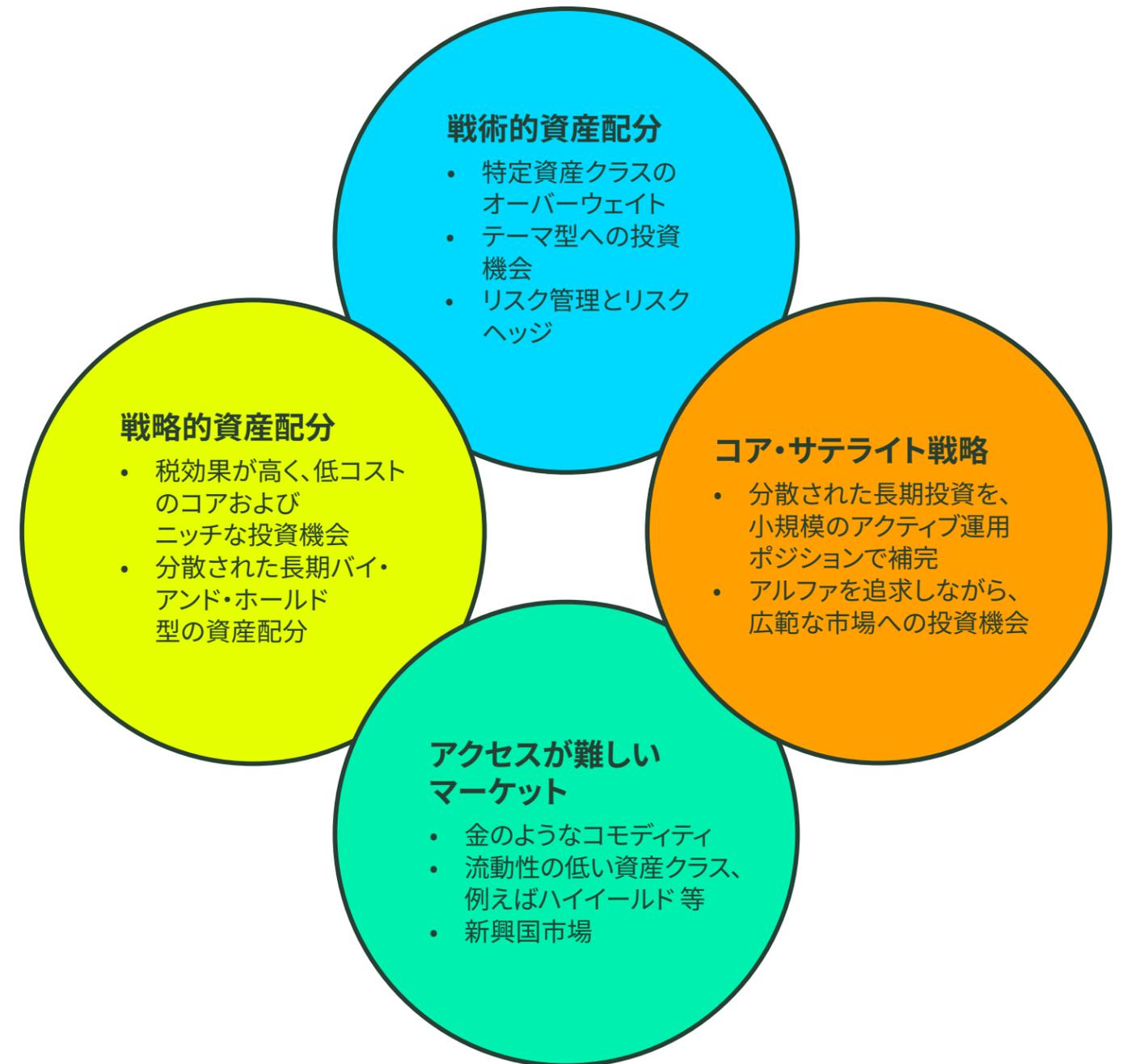
コア・サテライト戦略

昔から繰り広げられてきたアクティブ運用対パッシブ運用の議論については、よくご存知でしょう。すなわち、「アルファ」を求めて市場をアウトパフォームすることを目指すのと（アクティブ運用）、シンプルに市場のリターンを再現することを目指すのと（パッシブ運用）どちらに価値があるのかということです。コア・サテライト戦略とは、実質的に両者を組み合わせたものです。第一の中心的な目標は市場のリターンを再現することで、第二の目標としてアルファと分散の機会を模索します。例えば、市場連動型ETF（コア）に、セクター連動型やコモディティ連動型のETF、あるいは他のアクティブ運用ETF（サテライト）を組み合わせるといった方法です。

投資しにくい市場へのアクセス

資産の中には、他の資産よりも投資しにくいものがあります。しかし、それは少なくとも過去においての話です。ETFはこの状況を変え、債券、コモディティ、通貨、といった市場へのアクセスを民主化しました。これにより、ポートフォリオの分散とバランスが可能になっています。

図表6
投資家の幅広いニーズに応えるETF



出所：ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ。例示目的としてのみ記載。

そのためのETFがあります

道筋は無数に存在します。

どの道を選んでも、ETFがガイドとなり、一つの解を提案してくれるかもしれません。

ETFに関する情報やインサイトを随時更新中。



用語集

アクティブ運用 単独運用、共同運用、またはチーム運用など、人間の手を介して、ファンドの保有銘柄を選択し、時間の経過とともに調整するポートフォリオ管理アプローチ。アクティブ・マネージャーは、調査、予測、自身の判断と経験に基づいて、どの証券を購入、保有、売却するかを決定します。アクティブ運用の反対は、インデックス投資を含むパッシブ運用です。

アルファ ベンチマークは市場全体の動きを表すと考えられることが多いため、ベンチマークと比較して測定される、リスク調整後のアウトパフォーマンスの尺度。ベンチマークの指数のリターンに対するファンドの超過リターンがファンドのアルファです。

アセットアロケーション 資産を主要な投資カテゴリーに配分して分散化する方法。リスク管理やリターン向上のために使用される場合もあります。ただしポートフォリオを損失から守る保証はありません。分散化は利益の獲得あるいは損失の回避に必ずしもつながるわけではありません。

設定および交換のプロセス ETF発行者が、ETFの新株の発行または売却と引き換えに、バスケットに束ねた資産を追加または現物拠出するプロセス。

分散化 リスクを低減するためにさまざまな投資商品や資産クラスを幅広く組み合わせる戦略ですが、下落相場でポートフォリオを損失から守れる保証はありません。

取引所 証券、商品、デリバティブ、ETFなどのその他の金融ツールが取引される市場。証券取引所などの取引所では、公正かつ秩序ある取引と証券価格の効率的な流通が可能になります。取引所は、上場を検討している企業に、そのためのプラットフォームを提供します。

上場投資信託 (ETF) 株式、債券、通貨、コモディティといった有価証券を一つのバスケットに束ねたもので、取引所における1回の取引でまとめて売買することができます。通常、手数料 (運用報酬) 控除前の指数パフォーマンスに連動し、資産クラス、地域、セクター、投資テーマといった特定の市場セグメントに的を絞ったエクスポージャーを提供します。

指数 (インデックス) 何かの指標または尺度。通常は証券価格。インデックスは通常特定の市場を表す有価証券 (株式、債券、さらには先物契約) の架空のポートフォリオです。日本株式で有名な指数は日経225指数、TOPIX指数等。

流動性 資産または証券が、資産の価格に影響を与えることなく、市場で売買できる度合い。取引水準が高い場合に、流動性があると見なされます。

パッシブ運用 プロセスから人間の積極的な手をできる限り取り除き、証券選択に対する体系的でルールに基づいたアプローチに置き換える投資戦略。パッシブ運用、特にインデックス運用は、通常、ポートフォリオの回転率を制限し、費用のかかる調査を必要としないため、比較的安価です。

発行市場 (プライマリー市場) ETFの受益証券が設定されたり、交換されたりする市場。

実物資産投資 価値があり、多くの場合投資可能な物理的または有形の資産。実物資産には貴金属、商品、不動産、農地、石油が含まれており、これらをポートフォリオに組み込むことで分散させるのは適切であると考えられます。

リスク 投資の収益が期待収益と異なる可能性、特に投資の一部または全部を失う可能性。リスクは通常、特定の投資の過去の収益または平均収益の標準偏差を計算することによって測定されます。

流通市場 (セカンダリー市場) 投資家が証券や資産を、発行会社そのものからではなく、他の投資家から購入、または他の投資家へ売却する市場。

S&P 500指数 米国大型株の動向を表す最良の単一尺度として広く認められており、さまざまな投資商品でベンチマークに採用されています。主要企業500社により構成されており、利用可能な時価総額の約80%を網羅しています。

セクター投資 経済の1つまたはそれ以上のセクターに資産を投資する投資家またはポートフォリオ。

スワップ 個人投資家ではなく、通常は企業や金融機関によるあらゆる種類の金融商品の交換を伴うデリバティブ契約です。最も一般的な種類のスワップは金利スワップです。スワップは取引所では取引されません。

トラッキングエラー ポートフォリオのリターンがベンチマークのリターンとどの程度一致しているかを示す尺度。実際には、どのインデックス戦略も指数やベンチマークのパフォーマンスと完全に一致することはありません。トラッキングエラーは、2つの値の間の標準偏差を年率で測定することによって、戦略が指数やベンチマークとどの程度異なっているかを定量化します。

ボラティリティ 市場指数や個別証券の価格が大幅に変動する傾向。ボラティリティは通常、リターンの年率標準偏差で表される。現代ポートフォリオ理論 (MPT) では、ボラティリティの高い証券は損失が発生する可能性が高いことから、一般的に高リスクと見なされる。

ご留意事項

本資料は、情報提供を目的として作成したものであり、金融商品取引法およびその他日本の法律に基づく開示資料ではありません。本資料は、ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ株式会社を含むそのグループ会社が提供する外国籍ETF等に関する情報を含む投資情報の提供を目的として、グループ会社により作成されたものであり、投資の勧誘等を目的とするものではありません。本資料には、日本国内での募集の取扱い等に係る金融庁への届出等がされていない外国籍ETFに関する情報も含まれていることがあります。国内の金融商品取引所に上場していないETFについて、金融商品取引法に基づいた発行者開示は行われていません。

本資料は各種の信頼できると考えられる情報・データに基づき作成しておりますが、当社はその正確性・完全性を保証するものではありません。こうした情報は不完全であるか、要約されている場合があります。また、本資料に記載している各種情報・データは、特に記載のない限り作成時点のものであり、これらは市場動向やその他の状況等によって随時変動し、あるいは変更されることがあります。

本資料内の意見は全て当社あるいはグループ会社の判断で構成されており、事前に通知することなく変更される可能性があります。なお、本資料中のステート・ストリートに関する記述には、ステート・ストリート・コーポレーションおよびその関係会社が含まれる場合があります。ステート・ストリートの関係会社は、本資料のETFに関するサービスを提供すると同時に、信託報酬ないしその他の報酬等を受け取ります。

登録商標等について

“Standard & Poor’s[®]”、“S&P[®]”、“SPDR[®]”は、Standard & Poor’s Financial Services LLC (以下「S&P」)の登録商標です。“Dow Jones[®]”は、Dow Jones Trademark Holdings LLC (以下「ダウ・ジョーンズ」)の登録商標です。これらの登録商標は、S&P Dow Jones Indices LLC (以下「SPDJ」)が使用許諾を得ており、ステート・ストリート・コーポレーションは特定の目的の使用について再許諾を受けています。SPDJ、ダウ・ジョーンズ、S&P、それぞれの関連会社及び第三者の使用許諾者は、ステート・ストリートが提供する金融商品のスポンサーではなく、これらの商品の推奨・販売・宣伝もしていません。また、SPDJ、ダウ・ジョーンズ、S&P、それぞれの関連会社及び第三者の使用許諾者は、これらの商品への投資の適否に関していかなる意見表明もしておらず、関連する指数に係るいかなる過誤、遺漏ないし中断等に対しても責任は一切負いません。

その他のインデックス、登録商標ないしサービスマークに関しては、各会社及びその関係会社に帰属し、ステート・ストリートが特定の目的で使用許諾を得ています。本資料のETFの合法性や適合性について、インデックスあるいは登録商標等の帰属する各会社及びその関係会社は、何ら判断を下していません。また、発行・後援・裏書・販売・宣伝もしていません。インデックスあるいは登録商標等の帰属する各会社及びその関係会社は、ETFに関していかなる保証も責任も負いません。また、ETFの資産運用や販売に関していかなる責任も負わず、管理運営に携わることもありません。

投資にかかるリスクについて

ETFは、主に株式や債券などの有価証券、また金などのコモディティ、あるいはその他の資産に投資を行います。投資対象としているこれらの資産の値動きにより、ETFの基準価額が下落することがあります。これらの資産への投資には、市場リスク、金利リスク、カントリーリスク、信用リスク、為替リスク、流動性リスク等、様々なリスクがあり、ETFも同様のリスクが伴います。これらのリスク要因により、ETFの市場価格が下落する場合があります。その為、投資元本を割り込む恐れがあります。ETFは流通市場において株式と同様に取引されますが、取引価格は変動し、基準価額を下回ることがあります。また、常に取引可能であるとは限らず、市場環境が悪化している場合は、取引価格が大幅なディスカウントとなる可能性があります。ETFには上場廃止リスクがあり、純資産規模が縮小するなど、運用が困難になった場合や、上場取引所の上場基準に合致しなくなった場合、上場廃止となることがあります。これらは主なリスクであり、ETFへの投資に係るリスクはこれらに限定されるものではありません。

なお、コモディティETFやコモディティ指数連動証券は、市場全体動向の変化、金利の変化、および対象資産となるコモディティへの投機や裁定に係る取引活動に加え、天候や病気、通商条件あるいは政治や規制の展開の様な他の要因によって影響を受ける可能性があります。

ETFの投資にかかる一般的な留意事項

- 元本保証はされていません。
- ETFの一口あたりの純資産額の動きと連動を目指す特定の指数等の動きが乖離する可能性があります。
- 市場価格とETFの一口あたりの純資産額が乖離する可能性があります。

手数料・費用について

ETFを売買する際は、取扱いの金融商品取引業者の定める売買手数料がかかります。その他ETFを保有する際には、それぞれ個別に定められた費用がかかります。これらの費用には、運用会社・管理会社に支払う報酬、組入れ資産の売買の際に発生する手数料、ライセンス・フィー、監査費用等があります。これらは、運用の状況等によって変動するため、事前に上限額を示すことができません。本資料の掲載情報は作成時点のものであり、市場の環境その他の状況等により将来予告なく変更されることがあります。

※取得のお申し込みに当たっては、必ず上場有価証券等書面又はその他の開示書類の内容をご確認の上、ご自身でご判断下さい。

※購入のお申し込みや売買手数料等につきましては、当ETFを取扱いの金融商品取引業者（証券会社）までお問い合わせ下さい。

本資料は、ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズが作成したものをステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ株式会社が和訳したものです。内容については原文が優先されることをご了承下さい。

ステート・ストリート・グローバル・アドバイザーズ株式会社

金融商品取引業者 関東財務局長（金商）第345号
加入協会：一般社団法人 日本投資顧問業協会、一般社団法人 投資信託協会、日本証券業協会

© 2024 State Street Corporation. All Rights Reserved.
ID2130350-6649621.1.1.APAC.RTL 0424 Exp. Date: 31/03/2025